

時間の弁証法と差延の思考

——初期デリダにおける

アレクサンドル・コイレのヘーゲル研究の意義——

小原拓磨

1. はじめに

『散種』(1972年)のはじめに収載された「書物外」でデリダは、「時間とは序文の時間である」(Dis 18)とヘーゲル的な意味で記している¹。ヘーゲルの「序文」は、それを読むことによってそれに続くすべてのものをもはや読まなくてよいものにし、いわばそれらを「先取り」させるものである。このような序文の時間はしたがって次のように説明される。

序文の序は未来を現在たらしめ [le *prés* de la *préface* rend *présent* l'*avenir*]、再現前化し、未来を近づけ、未来を吸い込むのであり、未来に先行しつつも未来を先に置く。未来は明白な現前性の形式に還元される。(Dis 13)

この時間性をデリダは「本質的だが笑うべき操作」とみなす。その理由のひとつは、「エクリチュールはこれらの時間(現在、および変様された現在としての過去や未来^{フューチャー})のいずれにも収まらない」からである(Ibid.)。デリダはここで「現前性(*présence*: 現在性)」に回収される時間を批判している。『グラマトロジーについて』(1967年)はこの現前性優位の時間性に対して、あるいは未来予持と過去把持の弁証法による生き生きした現在の時間構成に対して、ここに痕跡としてのみ記される「絶対的過去」について語っている。それは「変様された現在の形式では、つまり過ぎ去った - 現在としては、もはや了解されえない過去」であり、「時間一般についての形而上学的概念」では理解も説明もできない仕方^{アヴェニール}で「未来」に関係している(DG 97)²。

デリダはもう少しさきでこの過去(「現前の形式——根源的であれ変様されたものであれ——においてかつて一度も生きられたことがなく、そして今後も決して生きられることのない過去)を、ハイデガーに引き寄せつつハイデガーから引き離す。すなわち、その他性は、「ハイデ

¹ 正確には、「時間とは序文の時間であり、空間——時間がその真理だったことになる——とは序文の空間である」、と書かれている。挿入句のヘーゲル的時空論に従って、本研究は時間の観点に絞って論を進める。

² ヘーゲルの「序文の時間」とデリダの「かつて一度も現前したことのない過去」をフランス語文法の「前未来」時制の二義性によって明解に整理している以下の研究も参照。亀井大輔『デリダ 歴史の思考』法政大学出版局、2019年、214-215頁。

ガーの意図に合致しつつ […] ときにハイデガーの言説の彼方で、「存在の意味を現前として規定した」存在論を動揺させる (DG 103)。したがって冒頭の「序文の時間」の読解も、この文脈にある。ハイデガーに従いつつハイデガーを超える地平で、また絶対的な過去をみとおす展望で、ヘーゲルの時間性が読まれている。この作業はとくに、「書物外」より以前の「ウーシアとグランマー」(1968年)において積極的にこなわれている。

本研究は、こうしたデリダの想定する時間性(現前の形式を逃れる時間)に着目しつつも、その内容の解明ではなく、この時間性を探求するにいたるデリダの思索背景の解明を試みる。言い換えれば、ハイデガーに関わるデリダの二重の読解企図について、その着想の原点を考察することが主たる目的である。そのさい注目するのはアレクサンドル・コイレのヘーゲル研究であり、そこでのコイレの思考がデリダの時間読解にどのような影響を与えたのかを確認する。

2. 特別な地点での差異的關係

周知のように、デリダは論考「差延」(1968年)にてコイレの論文「イエーナのヘーゲル」に言及している。「差延」の語の基本的解説をしながら、デリダはコイレのある脚注へと注意を喚起する。それは、ヘーゲルの「イエーナ体系構想」からの引用文に登場する「*differente Beziehung* (差異的關係)」の語にコイレが付した注記である。当の引用文で叙述されているのは時間の運動の分析で、時間の運動は「いま」の自己否定作用から説明される。

この単純態における無限なもの〔「いま」〕は、自己同等なものに対する契機として否定的なものであり、[…] 排除するものであり、点または限界一般である。しかし、そうした否定作用において無限なものは直接に他なるものに関係し、自分自身を否定するものである。限界、あるいは現在の契機、時間の絶対的なこれ、あるいは「いま」とは、絶対的に否定的に単純であり、すべての多数性を自分から排除する。³

「いま」は単純な点であり、同時に、「先行する“いま”」と「後続する“いま”」を排除する否定的な点である。しかしまた「いま」は自分自身をも否定し、排除し、自らの他者(次の「いま」)へと自ら移行してゆく。「いま」は自ら差異化し、自らと異なり続け、同時にまさしくそれによって、自らと同じものつまり「いま」という時間であり続ける⁴。このように運動する「いま」が「*differente Beziehung*」と言われる(「いまは単純なものの絶対的に差異的な関係 (*absolut differente*

³ G. W. F. Hegel, *Jenaer Systementwürfe II*, hrsg. von Rolf-Peter Horstmann, Hamburg: Felix Meiner, 1982, S. 207. (『自然哲学 上巻——ヘーゲル哲学体系初期草稿(二)』本多修郎訳、未來社、1973年、43頁)

⁴ 「〈今〉の自己からの〈隔たり〉が時間の流れを形成し、〈今〉の自己同一性がその流れの連続性をかたちづくる。〈今〉が差異化しつつ同一性を保ち続けることが、〈流れる時間〉の本性である」(熊野純彦「歴史・理性・他者——ヘーゲルをめぐる問題群によせて」、現象学・解釈学研究会編『理性と暴力——現象学と人間科学』所収、世界書院、1997年、80頁)。

Beziehung) である」⁵⁾。

デリダがヘーゲルのこの表現にひっかかるのは、「ラテン語根をもつこの語 (differente) はドイツ語ではめったに出会われないし、ヘーゲルにおいても同様であると思われる」からである (M 14)。実際、ヘーゲルが「差異」や「区別」を言うとき、彼はむしろ *Unterschied* や *Verschiedenheit* の語を使用し、そしてそれらはつねに彼の体系に即して使われている。ヘーゲル思想の早期であるこの時期 (いわゆる「イエーナ期」) は、だからといって、そうした後年の体系的厳密さが未成熟の時期というわけではまったくない。コイレによれば、「世に出た時点でヘーゲルはすでに成熟しており」、イエーナ期でもその著述には「すでに相当に体系への道を進んだ思考が見てとれる」 (HI 148n., 149)。してみれば、ここで問題となっている *differente* の語に関しても、デリダの直観どおり、それもまた十分に熟慮されて使用されているとみなすべきである (といってもそれは、*Unterschied* や *Verschiedenheit* の語では事象を正確に表しえないという理由 (熟慮) からの *differente* の語の使用であり、この語をデリダ的な仕方で使用しているということではもちろんない。それでも、この語を採用したかぎり、ヘーゲルもまたデリダ的展望から「見ることなしに見ている」 (ED 381) と言えるのではないだろうか)。

さて、そのデリダが注目するコイレの脚注は、この問題の語に付される。コイレはこう記している。「差異的關係 [rapport différent] は *differente Beziehung* の訳。これは差異化する関係 [rapport différenciant] と言ってよいだろう」 (HI 168n.)。 *differente Beziehung* (差異的關係) という語句はヘーゲルの原文ではこのあともう一度登場しており⁶⁾、コイレはこちらにもまた別の脚注を付している。「《差異的 [différent]》の語はここでは能動的な意味^{アクティブ}でとらえられている」 (HI 169n.)。コイレによれば、ヘーゲルの *differente* は「能動的な差異化」を言っており、「いま」(時間) は「差異化する関係」(rapport différenciant) として解されている。コイレのこの「見事な説明」によって、a を伴った *différence* つまり *différenciant* が洞察され、事態は *différance* へとずれはじめる。

「différent」あるいは「différance」と (a つきで) 書くことは、この特別な地点においていかなる脚注や説明もなしにヘーゲルの翻訳を可能にするという有用性をすでにもっている、と言えるだろう。しかもこの地点はヘーゲルの言説の絶対的に決定的な地点でもある。(M 15)

自らを否定し、自ら差異化する、時間のこの弁証法的働きそのものを、デリダはここで「差延」として捉え直そうしている。

だがその前に、なぜこの箇所は「特別な地点」と言われるのか。ここはなにゆえ、「ヘーゲルの言説の絶対的に決定的な地点」と言われるほど特権化されているのか。この問いは、同年のもう

⁵⁾ Hegel, *Jenaer Systementwürfe II*, op. cit., S. 207. (前掲、43 頁)

⁶⁾ 「この限界 [いま] は自らの否定的な諸契機のなかで分けられており、排除作用としての自分 [現在] と自分を排除するもの [将来] との関係である。この関係は、両者がそこで保持されるひとつの差異的關係として、現在である [Diese Beziehung ist Gegenwart, als eine *differente Beziehung*, in der sich beide erhielten]」 (Hegel, *Jenaer Systementwürfe II*, op. cit., S. 208 ; 前掲、44 頁)。

ひとつの論文「ウーシアとグランメー」を参照することで明らかとなる。

この論文ではハイデガーの『存在と時間』のある長大な脚注に焦点が当てられているが、その脚注でハイデガーは次のように記している。

ヘーゲルの規定する時間概念もまた通俗的な時間理解に、すなわち伝統的な時間概念に沿っている。それどころか、ヘーゲルの時間概念はアリストテレスの『自然学』から直接くみ取られているとさえ示しうる。ヘーゲルの『イェーナ体系構想』は […] すでに『エンツュクロペディー』の時間分析をそのあらゆる本質的な点において完成させており、しかし明らかにそれは実はアリストテレスの時間論のパラフレーズである。 […] アリストテレスは時間の本質をいま [vūv] のなかに見、ヘーゲルもいま [Jetzt] のなかに見る。アリストテレスはいまを限界 [ὄρος] とみなし、ヘーゲルはいまを「限界」[Grenze] と解する。アリストテレスはいまを点 [στυγή] と理解し、ヘーゲルもいまを点 [Punkt] と解釈する。アリストテレスはいまをこのあるもの [τόδε τι] と特徴づけ、ヘーゲルはいまを「絶対的なこのもの [absolute Dieses]」と呼ぶ。 […] ヘーゲルの時間概念とアリストテレスの時間分析との直接的な連関を指摘したが、それはヘーゲルがアリストテレスに「依存」していると言い立てるためではなく、この親子関係がヘーゲルの論理学に根本的で存在論的な影響を及ぼしていることに注意を喚起するためである。⁷

気づかれるとおり、ハイデガーがすでにヘーゲルの「イェーナ体系構想」の時間論を扱っている。しかもハイデガーはそこに哲学の伝統的な時間理解を集約し、時間は哲学の歴史上つねに「いま」を基点に思考されてきたと述べる。(もっとも、そのことはヘーゲル自身も認識していたことではある。「いまは途方もない権利 [ein ungeheures Recht] をもっている」⁸とヘーゲルは書いている。) デリダにとってハイデガーのこの注記が意味しているのは、したがって、時間(と存在)は哲学においてこれまでずっと「現在 - 現前」から考えられてきた、ということである。現在がもっているあの「途方もない権利」、これこそ「哲学の歴史全体が掘りどころにしてきた当のもの」であり、まさしくそこにおいて「意味、理性、《良》識がいつも産み出されてきた」のであり⁹、そして、まさしくこの同じ権利が「普通の言説を思弁的言説に、とくにヘーゲルの言説に接合する」(M41)。

以上から、デリダがなにゆえヘーゲルのあの箇所を特権化し、「特別な地点」や「ヘーゲルの言説の絶対的に決定的な地点」と呼ぶのかが理解される。まさしくこの地点に哲学の歴史全体が依

⁷ M. Heidegger, *Sein und Zeit* (1927), Tübingen: Max Niemeyer, 11 Aufl., 1967, S. 432f. Anm. (『存在と時間下巻』細谷貞雄・亀井裕・船橋弘共訳、理想社、1964年、328-330頁)

⁸ Hegel, *Werke*, Band 9, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften II*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1970, S. 50. (『ヘーゲル全集』第2a巻、加藤尚武訳、岩波書店、1998年、58頁)

⁹ 別のところでもデリダは同様の指摘をしている。「[いま - 現在の] この特権は哲学的思考の境位そのものを定義しており、つまりそれは明証そのものであり、意識的思考そのものであり、真理と意味の可能な概念すべてを統率している」(VP 74)。

拠している。そして、この特別な地点にヘーゲルは「*différente*」というめったに使われない語を記載し、それをコイレが「能動的な差異化」としての「*différenciant*」へとずらし、デリダが *différance* として読み取る。

3. 時間の差異化作用

そうすると、コイレはどのような思考によってあの注記を付すことができたのだろうか。同じロシア移民で友人でもあるA・コジェーヴが「私の『精神現象学』解釈の源泉であり基礎をなしている」「決定的論文」¹⁰と称賛するこの「イエーナのヘーゲル」(1935年)において、コイレは当時出版されたばかりのヘーゲルの「イエーナ講義録」の解説を試みている。本研究では問題の注記に関わる部分にのみ焦点を当てるが、結論から言えば、コイレの「能動的な差異化」の着想は実のところヘーゲルその人に由来する。

ヘーゲルがわれわれに対立と矛盾について述べる時、[...]「矛盾」は内的緊張、内的引き裂きである。対立のこの闘争において、精神は「自らを肯定し」、「自らを否定し」——自らを再否定し——「自らを廃棄し」、「自らを乗り越え」、「自らを無化する」。[したがって、]対立の「異なった」両項と言われるとき、それらは静かにおとなしく異な^うて^て在^る諸項 [*termes qui sont différents*] ではない。それらは「異なる」諸項 [*termes qui « différent »*] であり、すなわち互いに反発し遠ざけ合う諸項である。同様に、「異なった [*différents*]」諸行為とは、自らが対象とする諸項を「異な」らせ [*faire « différencier »*]、「異なるもの」にし [*rendre « différents »*]、まさにそれによって「他なるもの」にする行為、つまり差異化する [*différencier*] 行為、区別する行為である。そしてまさにこの行為こそ、あらゆる「差異 [*différence*]」の根底に見出されるものである。ヘーゲルは哲学の千年以上の伝統に反して、実詞ではなく動詞で思考している、と言ってもいいだろう。(HI 174)

コイレの理解では、ヘーゲルにおける対立や矛盾は「精神」の自己差異化作用であり、精神が自らを他者化し、その異なる自己に自ら関係してゆく動的な差異関係である。したがって、問題の語句「*différente Beziehung*」が「差異化する関係 (*rapport différenciant*)」と解釈されるのは、精神のこの能動的差異化の運動を想定してのことであり、そのかぎりでは、コイレからすれば当の注記はきわめてヘーゲル的な注釈なのである。さらに、コイレはこの見解をより徹底化する。この注記が付された箇所では問題となっていたのは時間であった。時間とはヘーゲルにおいては精神が現象することそれ自身であり、それゆえ「ヘーゲル的精神は時間であり、ヘーゲルの時間は精神である」(HI 179)。かくして、ヘーゲルの時間論を差異の思想から読解して、コイレは次のように断言する。「差異化 [*différenciation*] において、差異化によって、時間の弁証法的運動が構成される」

¹⁰ Alexandre Kojève, *Introduction à la lecture de Hegel*, Paris: Gallimard, 1947, p. 367. (『ヘーゲル読解入門——『精神現象学』を読む』上妻精・今野雅方訳、国文社、1987年、201頁)

(HI 180)。

時間現象の根底に差異を見出し、時間の運動を差異によって説明する、というコイレのこうした思考は、間違いなく、時間についてのデリダの考察の手引きとなっている。ところが、デリダはコイレのこの脚注を取り上げる直前、「起源なき差延（の産出）のこの（能動的）運動を、新しい綴り方をせず、まったく単純に、差異化〔*différenciation*〕と呼ぶこともできたのではないか」（M 14）と自問している。そうしなかった理由をデリダはふたつ挙げる。ひとつは「そうした語が、なにか有機的で根源的で同質的な統一体を思い浮かべさせてしまう」からであり、もうひとつは「その語は *différencier*〔差異化する、区別する〕という動詞をもとに形成されているため、迂回と時間化をもたらず遅延との意味合い、つまり *différer* の経済的な意義を消去してしまう」からである（*Ibid.*）。前者の論点はすでに指摘されているとおりの「生の哲学」との区別に関わり¹¹、後者は「差延」の時間性に関わっている。ここでの「差異化」の語はしたがって、前者を積極的に受ければ、ドゥルーズのような差異の哲学の主要概念を示唆している（そしてそこから距離を取ろうとしている）と読むことができ、後者の観点からすれば、またそもそも「能動的」の語および文脈からしても、明らかにコイレの「差異化」を指しているだろう。

けれども、コイレの「差異化」に言及するその身振りは単純ではない。迂回や遅延の経済的意義のために「差異化」の語を採らないという態度は、一方で、「差延」の思考にとって時間性が根本的であること、言い換えれば、時間を差異化の運動としてとらえるコイレの思考が無視できないものであることを意味するだろう。しかし他方でその態度は、時間を単純にコイレに従って思考するわけにはいかない、ということも言っているだろう。なぜならコイレの時間理解は、デリダからすれば、結局のところヘーゲル的地平の時間理解であり、すなわち現前性に回収される時間概念——序文の時間——だからである。しかし、そうは言ってもこのコイレ＝ヘーゲル的な時間性からの離脱はそれほど容易ではない。

まず、時間性を差延によって読解するデリダを見てみよう。現前的時間性を脱構築するデリダの明快な手際と言え、ご承知のとおり、『声と現象』におけるフッサールの「生き生きした現在」の分析であろう。

知覚される現在の現前は、非 - 現前および非 - 知覚と、すなわち一次記憶および一次予期（把持と予持）と、連続的に合成されるかぎりでのみ、それとして現れうる。これら非 - 知覚は、現働的に知覚される「いま」に、場合によって付加されたり付随したりするわけではない。それらは本質的かつ不可欠に「いま」の可能性に参加している。（VP 76）

非 - 現前との関係によってこそ現前は出現可能となり、それゆえ生き生きした現在とは純粋な単一体ではなく、非 - 現前との複合体である¹²。この論旨はそのまま論考「差延」でも繰り返される。

¹¹ 宮崎裕助『ジャック・デリダ——死後の生を与える』岩波書店、2020年、55-56頁および235-236頁。

¹² この時期、フッサールの思想に弁証法的働きを読み取る研究はいくつも発表されており、デリダの

この現在の構成、すなわち（ここで類比的かつ一時的に現象学のおよび超越論的な言語を再現して言えば〔…〕）諸々の過去把持と未来予持の標記と痕跡からなる総合としての、また、「根源的」だが還元不可能なほど非 - 単一的であるゆえに厳密な意味では非 - 根源的な総合としてのこの現在の構成、これこそは私が原 - エクリチュール、原 - 痕跡、あるいは差延と呼ぼうと提案している当のものである。（M 14）

原 - エクリチュール、原 - 痕跡、差延が、「過去と呼ばれるもの、ならびに、未来と呼ばれるものに自らを関係させ、そしてこの関係そのものによって、現在と呼ばれるものを構成する」（M 13）。

したがって、時間（いま - 現在）は差延の作用で構成される。哲学的言説がその起源とする現前的現在（意識の明証性）は、始源であるどころか、遅れてやって来る差延の効果である（だからと言って、差延がこれによって「根源的なもの」つまり現前的な起源に取って代わるというわけではもちろんない。「したがってわれわれは現前を——とりわけ意識を、つまり意識が自己の傍らに在ることを——もはや存在の絶対的な母型としてではなく、ひとつの《規定態》、ひとつの《結果》として措定するにいたる」（M 17）。しかしながら、この言明は注意しなければならない。というのも「起源は結果である」や「結果としての起源」といった命題は完全にヘーゲル的な言明だからである¹³。また、時間を「総合」として構成する特徴自体、そもそも弁証法的である。事実、こうした「現在の構成」はコイレの時間分析にも見出せる。

〔いま、過去、未来という〕これら異なる三契機は、自らの差異化作用において互いに延び広がり、一定の時間量を引き起こすが、他方で、自分たちの統一と差異のなかにふたたび把捉されて、不安定で生き生きした統一のなかで、われわれがヘーゲルとともに「現在」と呼ぶことになるものを構成する。〔…〕したがって「現在の」瞬間は、お気づきの通り、単純ではない。それはある内的構造をそなえており、この構造が唯一、瞬間が自己自身に対して現前することを可能にする。（HI 177-178）

「現在」はある内的構造をそなえており、現在はそれによって現在として現前する。この内的構造をコイレは「差異化（作用）」と呼び、デリダは「差延」と呼んでいる。さしあたりそのように同一視することは可能だろう。

読解もまたこの潮流に属するものである。この文脈からデリダのフッサール読解および弁証法の語の使用と展開を扱った詳細な研究として、以下の著作を挙げておく。松田智裕『弁証法、戦争、解読——前期デリダ思想の展開史』法政大学出版局、2020年（とりわけ第一章および第二章）。

¹³ 「この命題——結果としての起源——は文字通りヘーゲル的である。それは思弁的弁証法の本質を集約しており、本来的に思弁的弁証法の命題である。〔…〕ヘーゲルは『大論理学』の冒頭でこの命題をラテン語で書いているが（*Der Anfang ist das Resultat* [起源は結果である]）、それは偶然ではない」（M 334-335）。

したがって、時間の読解に関してコイレ＝ヘーゲルの地平から距離をとることは並み大抵のことではない。もちろんデリダはそのことに気づいていた。「ヘーゲルの言説と縁を切ることはできないし、そもそもそんなことにはなんの意味もないし、そのチャンスさえない」(M 15)。「差延」の思考はなおヘーゲル的であり、だからこそ「差延はひとつの形而上学的名称にとどまる」(M 28)と言われる。そうだとすると、「このように書かれた差延は、ヘーゲルの言説ときわめて深い親近関係をもつにもかかわらず、ある地点で […] ヘーゲルの言説の位置ずらし [déplacement] を、微細であると同時に根底的なある種の位置ずらしを仕掛けることができる」(M 15)。時間を差延の思考で読解することで、同時に、ヘーゲルの体系を動揺させることができる、デリダはそう確信している。そしてデリダにとってそれを可能にしてくれるものこそ、ハイデガーの思考である。実際、論考「差延」においても、「ウーシアとグランメー」においても、さらにはのちほど取り上げる論文「人間の目的＝終わり」でも、デリダはヘーゲルについて論じたのちにハイデガーの議論を持ち出している。デリダはハイデガーの眼でヘーゲルを読むことで、閉じた体系内の外部を見出そうとしている、と言えるだろう。

ところで、本研究の観点では、デリダのこのふるまいはふたたびコイレに重なっているように見える。というのも、コイレもまたハイデガーによってヘーゲルを読んでいるからである。

4. ハイデガーとともにヘーゲルを

論文「イエーナのヘーゲル」にてコイレはヘーゲルの時間論の積極的な解釈を試みているが、そのさい、一度も言及されていないにもかかわらず、明らかにハイデガーの思考が想定されている。まずコイレは、一方で、ハイデガーがヘーゲルにおける時間の本質を「点としてのいま」と規定するのに反対して、「ヘーゲルは《瞬間》の観念を起点としているわけではない」(HI 176)と述べる。ハイデガーの意味での「瞬間」つまり「点としてのいま」あるいは「限界としてのいま」は、コイレによれば、それこそはむしろヘーゲルが破壊しようとしてた当のものであった¹⁴。ヘーゲルの目論見はこの空虚な抽象的時間を破壊し、それによって時間そのもの——「時間の精神的実在」(HI 175)——を叙述することであった。

コイレはこうした理解のもとでイエーナ期のヘーゲルを読解し、そこから、「点と限界としてのいま」あるいは「瞬間」とは別の、それとは区別された「いま」あるいは「方向づけられた瞬間 [un instant dirigé]」の観念を提出する。同じ語が、その意味作用がずらされて、使用される。これによってコイレは、ヘーゲル的時間を抽象的あるいは通俗的な時間概念から引き離す。

¹⁴ したがってまた、コイレはホフマイスターにも反論する。「J・ホフマイスターは〔ヘーゲルの表現《Geist ist Zeit》を〕《Geist ist in der Zeit》のかたち修正することを提案している。われわれはこのような修正をすべきではないと考える。ヘーゲルの精神は時間であり、ヘーゲル的時間は精神である」(HI 179)。「in die Zeit (時間のなかへ)」と表記される時間は抽象的時間であり、ヘーゲルの精神的時間とは異なる。したがってこの批判は同時に、ヘーゲルの時間をこの「in die Zeit」の時間として理解し批判するハイデガー——「精神は時間のなかへ落ちる」(Heidegger, *Sein und Zeit*, op. cit., S. 428; 前掲、318頁)——にも暗に向けられていることになる。

この「いま」は本質的に移ろいやすく、すぐさま消えてなくなり、つかまえることは不可能である。それはただちに別のものへと変容する。それは自分自身を否認し、自ら自己自身を廃棄する。[...] ヘーゲル的な「いま」は、わずかな厚みももたない瞬間的なものであるにもかかわらず、まさしくひとつの方向づけられた瞬間である。けれどもそれは過去へ向けて方向づけられているわけではない。それが向けられているのは、反対に、将来である。まさしくこの将来 [avenir] こそ、まず最初に「来たるべきもの [à-venir]」としてわれわれに現前するものである。この「来たるべきもの」が、われわれにとって「いま」であったものを、「もはやない [le « n'est plus »]」の方へと投げ返す。将来はこれを為しながら自己自身を否認して今度は「いま」になり、そうして新たな「来たるべきもの」によって今度はそれもまた「もはやない」へと投げ返され、「かつて」[過去]へと変容する。(HI 176)

新たな「いま」の観念とともにヘーゲルの時間運動が描写され、そのなかでも「将来」が際立たせられる。将来のこのような強調（そして過去に対する将来の優位）こそは「ヘーゲルの最大の独自性」である、とコイレは述べる (HI 177)。将来を重視するこの読解は、別のところでのコイレの注記から理解されるように、明らかにハイデガーの言説に拠っている¹⁵。したがって、コイレはいまやハイデガーの視点でヘーゲルを読んでおり、すなわち、ヘーゲルの精神的時間はハイデガーの「根源的時間」として読まれている（「時間性は根源的には将来から時間化する」¹⁶）。

ところで、コイレのこうしたヘーゲル解釈は最終的には人間学的読解であることが判明する。「ヘーゲルの時間とは何よりもまず人間的な時間であり、人間の時間である」(HI 177)。時間があるように将来を源泉とするのは、コイレによれば、その時間が「人間の時間」だからである。ここにヘーゲル哲学（とくに『精神現象学』）の人間学的読解の可能性が開かれ、のちにコジェーヴがこれを徹底的に発展させることになる。だが、ヘーゲルであれ、ハイデガーであれ、そのテキストの人間学的な読解という点で、デリダとコイレはまったく相容れない。デリダは論文「人間の終わり＝目的」（1968年）でそうした読解が誤読であり、「おそらくもっとも深刻な誤読であった」(M 139) とはっきり記す（その誤読がむしろ「戦後のフランス思想に最良の概念的資源を提供した」(Ibid.) とはいえ）。デリダは彼らの思想の非人間学的な特徴を論証する。ヘーゲルについては、（とりわけコジェーヴが『精神現象学』を人間学化したことを念頭に、）『エンツュクロペディー』での「精神の現象学」節の位置づけを根拠として¹⁷、『精神現象学』は人間学から厳密に区

¹⁵ 「可能性の優位性は、時間の他の《ex-stases》（諸次元）[現在と過去]に対する将来の優位性を前提としている。われわれは将来にもとづいて生き、行動する。この点で [...] M・ハイデガーとヘーゲルが出会う」(A. Koyré, « L'évolution philosophique de Martin Heidegger » (1946), in *Études d'histoire de la pensée philosophique*, p. 280n.)。

¹⁶ Heidegger, *Sein und Zeit*, op. cit., S. 331. (前掲、170頁)

¹⁷ 『エンツュクロペディー』「精神哲学」の第一章「主観的精神」はA「人間学」、B「精神の現象学」、C「心理学」として構成されている。

別される」(Ibid.)と述べ、ハイデガーについては、『ヒューマニズムについて』の一節を援用しながら、「形而上学や古典的存在論の《破壊》はまさしく人間主義に対してさえ向けられている」(M 140)と書く。

他方、「ヘーゲルの言説の絶対的に決定的な地点」にハイデガーの思考を挿し込むというコイレの手法は、たしかにデリダにとって示唆的であっただろう。ただし、デリダはコイレとはまったく別の仕方ではハイデガーに依拠することになる。そもそも、ハイデガーの思考を導入したにもかかわらず、コイレの時間解釈がまだはっきりと「現前」の価値を保持している点で、コイレの思考も現前の形而上学の伝統に属している。たとえ「いま」が点や限界という伝統的時間概念から解放されたとはいえ、いま - 現在の「途方もない権利」はまだ失われていない。あるいは、かりに「将来」の優位ということを受け入れるとしても、その将来は「まず最初にわれわれに現前する [se présenter à nous]」(HI 176) ものとして明示されている。こうした現前中心の時間性を突破して、現前の範疇に属さない時間性を探求することがデリダの目的である。そのためにデリダにとって不可欠なものがハイデガーの思考であり、それゆえの、ハイデガーの「痕跡」概念の徹底的な考究である（「差延」および「ウーシアとグランメー」両論考の後半の主題）。痕跡こそは、絶対的過去の痕跡として、この現前性を逃れる時間性の唯一の手掛かりである。「痕跡を——それゆえ差延を——現在にもとづいて、あるいは現在の現前にもとづいて思考することはできない」(M 22)。この見地から読まれるべきは、コイレの依拠した『存在と時間』のハイデガーではなく、「転回」以後のハイデガー、とりわけ「時間と存在」(1969年)の思想へ向かうハイデガーである。この違いはそのまま、同じハイデガーに従うコイレとデリダの違いとなるだろう。そして同時に、これが、「ハイデガーの意図に合致しつつ […] ときにハイデガーの言説の彼方で」(DG 103) という、冒頭で見たデリダの二重の読解企図へと昇華したのであろう、と本研究は考える。

5. おわりに——中期思想における痕跡

本研究はデリダの初期思想におけるコイレの両義的な影響について考察してきた。ただし、デリダ自身はこの影響についてほとんど語っていないため、その裏付けは難しい。それでも、「差延」の思考がコイレの「差異化」概念に触発されたことはたしかであるし、そこから主題的に「差延」の特異な思考を練り上げるさいにデリダがおこなったであろうコイレとの区別化は、明らかに、いかにハイデガーを根底的に読解するかの問題であっただろう。

最後に、中期以降で強調されるようになる「将来」の主題についても触れておきたい。今回見てきた初期の思考たとえば論考「差延」では、かつて一度も現前したことのない絶対的過去の「将来 [a-venir]」は、このさき、現前の形式における生産あるいは再生産であることは決してない」(M 22)と言われる。「過去の将来」や「来たるべき過去」とはきわめて奇妙な言い回しである。これが中期にいたってより積極的に、たとえば『メモワール』(1988年)においては次のように言われる。

この痕跡はかつて一度も現前したことのない過去の痕跡であり、その痕跡それ自身も決して

現前の形式をとっているわけではない。それはいわばつねに来たるべきもののままにあり、将来から到来するものたち、未来から到来するもののままにある〔[traces] restent toujours, en quelque sorte, à venir, venues de l'avenir, venue de futur〕。¹⁸

将来から到来する過去という時間性は、言うまでもなく現前の範疇と論理ではもはや語れない時間性であり、デリダがはじめからこだわっている時間性である。この『メモワール』は盟友ポール・ド・マンについて論じた著作だが、ポール・ド・マンを介してヘーゲルを論じる著作でもある。デリダはここでヘーゲルの「想起」と「記憶」の二概念を取り上げ、「想起されない記憶」に焦点を当てる。それは、かつて現前したことのない、いまも（再）現前化に抵抗する過去である。さらに、ここではそれはやがて到来するかもしれない過去、来るべき過去であると暗示されている¹⁹。ヘーゲル的時間（序文の現前的時間）を突破する時間性が、ヘーゲルの体系それ自身のなかに洞察されているだろう。

註

デリダとコイレからの各引用は下記の略号と頁数を（ ）に併記して、本文中に組み込んだ。デリダからの引用訳文は各々の既訳を使用または参照しながら適宜変更を加えている。また、引用中の傍点強調は原文のものとし、〔 〕内は引用者による。

Jacques Derrida, *De la grammatologie*, Paris: Minuit, 1967. [DG]

———, *La voix et le phénomène* (1967), Paris: PUF, 4^e éd. « Quadrige », 2009. [VP]

———, *La Dissémination*, Paris: Seuil, 1972. [Dis]

———, *Marges — de la philosophie*, Paris: Minuit, 1972. [M]

Alexandre Koyré, « Hegel à Iéna » (1935), in *Etudes d'histoire de la pensée philosophique*, Paris: Gallimard, 1971, pp. 147-189. [HI]（拙訳「イエーナのヘーゲル」、『知のトポス』、新潟大学大学院現代社会文化研究科、第15号、2020年、55-145頁）

¹⁸ J. Derrida, *Mémoires: pour Paul de Man*, Paris: Galilée, 1988, p. 70.

¹⁹ こうした読解の可能性は、実のところ、コイレの記述にも見出される。「いま」の複雑な流動性（あるいは決定不可能性）によって、過去が将来として到来するという運動がたしかに読み取れる。「《いま》、将来、かつて、これら時間の《異なる》三契機は釣り合いを保ち、含意し合い、喚起し合う。[…] 《いま》は、《いま》となった《将来》によって《かつて》へと変容させられるが、それによって消失したわけではない。実際の《いま》に対立しつつ、この変容した《いま》は、それ自身ふたたび《いま》となる。なぜなら《いま》は同時にまた、まだ現実化されていない将来であるからだ（HI 177）。《いま》は「かつて（過去）」へと変容するが、この過去となった「いま」は同時に「まだ現実化されていない将来である」と言われている。この言明を積極的に受け取るならば、コイレの時間解釈においても過去は将来として（再）到来することになる。もちろん、コイレの場合は現前的時間性の運動としてこれを記しており、つまり到来するのはかつて一度は現前した過去である。この点でデリダの展望とははっきり区別されるはずだろう。にもかかわらず、将来の到来の図式はよく似ている。ヘーゲル的時間地平から抜け出すためには、やはり多大な用心を必要とするだろう。